第5章
陸前高田市の概要

1 陸前高田市の原風景
2 陸前高田市の復興の歩み
3 陸前高田市の現在
4 陸前高田市の特産品

1 陸前高田市の原風景

海と山と川とともに生きるまち

風光明媚なリアス海岸のまち

岩手県の東南端に位置し、リアス海岸を有する陸前高田市。気仙川が注ぐ広田湾河口付近に三角州の平地が広がる一方、広田半島では入り組んだ海岸線に山がせまる。海と山が織りなす風光明媚な景観のもと、市民の生活は古くから海と山、川とともにある。

震災前の高田松原海水浴場

自然

山と海をつなぐ豊かな気仙川

陸前高田市の総面積約232㎢のうち、約7割を森林が占める。その豊かな森林地帯から広田湾に注ぐ気仙川は、岩手県を代表する清流の1つ。アユ、イワナ、ヤマメなどの魚が生息する自然の宝庫として、全国の渓流釣りの愛好家にも知られる。気仙川の下流部は、気仙地方（陸前高田市・大船渡市・住田町）の穀倉地帯でもある。

大滝小滝　提供：(一社)陸前高田市観光物産協会

蛇ケ崎　提供：(一社)陸前高田市観光物産協会

1 陸前高田市の原風景

受け継がれる
まちへの想い

営み

市民の憩いの場だったタピック45（旧道の駅高田松原）

こころに残るJR大船渡線陸前高田駅

津波で流されたJR大船渡線陸前高田駅は、まちの中心部に残る昭和の木造駅舎として市民に愛され、周辺の商店街は買い物客でにぎわった。平成30（2018）年4月、かさ上げ後の中心市街地に、JR大船渡線BRTの陸前高田駅が移転したが、駅舎はありし日の旧駅舎を模したデザインを採用。震災以前のまちをなつかしく思い出させる駅舎として好評を得ている。

震災前の陸前高田駅

震災前の駅前通り

数百年も続いてきた華麗な七夕まつり

8月上旬に行われる七夕まつりは、陸前高田市で数百年続くとされる伝統行事。豪華に飾られた山車がまちを練り歩く高田町の「うごく七夕まつり」と、山車同士をぶつけ合う気仙町の「けんか七夕まつり」がある。「うごく七夕まつり」は夜になると灯が燈り、幻想的な雰囲気を醸し出す。震災後は、犠牲者への鎮魂、支援への感謝も込めて開催されている。

高田町うごく七夕まつり（平成14年8月）

2 陸前高田市の復興の歩み

マイナスの状態からのスタート

被災

誰もがそれぞれに喪失感を抱えて

震災により、かけがえのない市民の生命も、歴史的・文化的財産も奪われた陸前高田市。15か所の防潮堤が破壊され、市庁舎をはじめ多くの公共施設などが倒壊するなど、市街地は壊滅的な被害を受けた。行政機能はもちろん、地場産業や観光業、商業、交通網などすべての社会的機能が大打撃を受けたが、市は再生を誓い、住宅や商業施設などを安全な地域に集約するコンパクトシティ化に動いた。

震災の翌朝、避難所へ向かう市民

落成式を終えたばかりの第一中学校の体育館が避難所になった

避難所での助け合い

避難所での安否確認

仮設住宅

2 陸前高田市の復興の歩み

将来の津波被害を回避するまちづくり

大胆な土砂運搬計画を担った「希望のかけ橋」

復興事業は、将来の津波被害から市民とまちを守ることを柱とした。陸前高田市は山を削って高台に新たな住宅地を造成し、掘削した土砂を巨大なベルトコンベアを用いて市街地に運搬・盛土。約10mものかさ上げを行った。全長約3kmのベルトコンベアはダンプカーでの運搬と比べ、時間を大幅に短縮し、渋滞や騒音・振動・粉塵の低減にも貢献。小学生たちにより、「希望のかけ橋」と名付けられた。夜間は点検のためにライトアップされ、夜が暗い被災地で市民に復興への希望を伝えた。

災害復興公営住宅の水上団地
（平成26年12月完成）

今泉地区の造成状況
（平成31年3月）

防災集団移転促進事業の大野団地

気仙川水門（令和2年3月）

被災者の住まいの再建を最優先で推進

陸前高田市の最優先課題は、被災者の住まいの再建。かさ上げ地や高台造成による土地区画整理事業を進めた。平成30（2018）年度にはすべての高台部が完成し、令和2（2020）年度にはかさ上げ部・平地部が完成し、引き渡しも完了した。防災集団移転促進事業による宅地造成については、平成30年7月までに全30団地が完成し、住宅再建が進む。災害復興公営住宅も、平成29年度までに11団地(総建設戸数895戸)すべての建設が完了した。

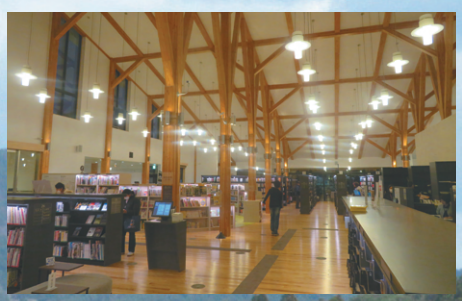
災害復興公営住宅の下和野団地（平成26年9月完成）

2 陸前高田市の復興の歩み

新しいまちのかたちは コンパクトシティ

新たな中心部に大型商業施設がオープン

震災後、陸前高田市は商工会と行政が協働し、各施設を中心部に集中させたコンパクトなまちづくりを進めた。かさ上げされた中心部に、大型複合商業施設「アバッセたかた」が平成29（2017）年春に開業。スーパーマーケットやドラッグストア、地元中心の事業者による専門店街が一体化し、にぎわいの中心的な存在となった。「あばっせ」とは、気仙地方の方言で「一緒に行きましょう」の意味。併設の図書館も夏に開業した。



陸前高田市立図書館

提供:(一社)陸前高田市観光物産協会

店が建ち並び、人が集まる風景が戻った

「アバッセたかた」を囲むようにして、中心市街地に飲食・小売店が戻り、新たな事業者の参入も増えた。平成29年秋、被災した商店4店舗が「アバッセたかた」のすぐそばで、「まちなかテラス」としてオープンし、商店街復活の一歩となった。隣接地には、大型遊具や芝生広場、交流施設などを備えた公園「まちなか広場」が完成。BRTなど新たな交通網も整備され、にぎわいとふれ合いが戻ってきた。

まちなかテラス

交流施設 ほんまるの家

まちなか広場